

石井(第七三一)部隊と兵要地誌に関する一考察

—— 書誌学的研究 ——

源 昌 久

0 はじめに

筆者は、先に「わが国の兵要地誌に関する一研究——書誌学的研究——」を発表した(源2000)。その際、石井部隊(第七三一部隊、名称の変遷については後述)が作成(調製)した兵要地誌についても若干、言及した。今回は、その成果を踏まえて、地理学と軍隊とがどのような関係を結んでいたのかについて、「石井部隊」という具体的な事例を取り上げて考察を試みたい。なお、本稿は、いわゆる第七三一部隊の悪魔的行為(人体実験・細菌作戦)を肯定するものではなく、地理学との関係をトレースしたものである。

石井部隊についての研究文献は、多数存在している。しかし、石井部隊に関する原資料(0次資料)は、極めて少ない¹⁾。また、石井部隊自身の自著資料で公開されているものも少ない。その理由のひとつは、当部隊および軍当局による関係資料・データの廃棄・焼却処分・隠蔽等が考えられる。中華人民共和国(以下、中国)、旧ソヴィエト社会主義共和国連邦(以下、ソ連)での第七三一部隊に関する裁判記録にある尋問資料²⁾は、どの程度、信憑性があるのか判断しかねる。

最近、1942-43年に作成された『陸軍軍医学校防疫研究』27点を収録している『高橋正彦ペス

ト菌論文集』の存在が判明したとの新聞記事(朝日新聞 2000)に筆者は接した。高橋は当時、第七三一部隊細菌研究部でペスト研究の責任者であった。また、本稿を執筆中(2001年8月)、“「日本帝国政府情報公開法」。ものものしい名前の法律が米議会で成立したのは、去年12月のことだ。(中略)捕虜の強制労働や731部隊などをめぐる未公開の史料が一気に公になる可能性がある。”(朝日新聞 2001)との記事も報じられた。このような状況下では、今迄、第七三一部隊の秘密裏にされてきた実態が解明されることも十分に考えられる。

石井部隊と地理学との関係を解明することを目指す研究は、既刊の書物の内容を首肯することだけでは成立し得ないであろう。筆者は、地理学に関する原資料(石井部隊著の兵要地誌類)に出来る限り当たることに努め、考察を進めた。

I 石井部隊の略歴

石井部隊作成の兵要地誌類を検討する前に、担当機関、つまり石井四郎³⁾(1892-1959)を中心に組織された第七三一部隊の略歴について拙稿に関係する事柄を中心に記してみよう。

石井四郎は、1928年から2年間、欧米に出張した(常石 1995:82)⁴⁾。この時期に、1925年のジュネーブ議定書で生物兵器の使用禁止が打ち

出されたにも拘わらず、石井は、細菌の兵器転用という発想を得たようである（森村 1983：256）。細菌の中でもペスト菌に彼が注目したのは、欧州歴訪中、ペストの恐怖について様々な話を聞かされたからではなかろうか（森村 1983：259-260）。

石井部隊が編成された契機について、全国憲友会連合会（1996：774）は、次のように述べている。

この部隊が編成されたそもそもの原因は、昭和十〔1935〕年に北満一帯にペスト病が大流行し、これがソ連の細菌謀略戦と一般に認められていた。そこで関東軍は石井軍医大佐を起用して、その原因、対策の究明に当たさせたのである。

石井部隊は、ソ連の細菌作戦への対策（報復を含めて）の研究を実施するために創設されたことがわかる。

石井部隊は、1933年、「関東軍防疫班」としてハルビン（哈爾濱）市の東南に位置する背陰河に設置された（森村 1983：309, 原・安岡1997：199）。これを拡張して、「関東軍防疫部」として、1936年12月以前に編成された（厚生省援護局 1963:57-57の4）⁵⁾。部長は石井四郎である。当初から、仕事の内容は、防疫の面（表）⁶⁾と細菌作戦・人体実験の面（裏）の二面を有している。厚生省援護局（1963：57）によると関東軍防疫部の組織内容は、“関東軍直轄部隊として部隊長以下全員軍医薬剤官及び衛生下士官兵をもって編成し各部隊の防疫給水及細菌の研究予防等の業務に従事。”と記されている。1938年6月13日、ハルビン市中心部から南へ約20km、平房^{ピンファン}へ移転建築される（森村 1983：17）。以後、数回

の組織編成の変更があり、1940年8月1日、関東軍防疫給水部と称号変更がなされる（厚生省援護局 1963:57の2）。この時点での組織は厚生省援護局（1963:57の2）によれば次の通りである。

“本部「ハルピン」総務部、第一、二、三、四部 資材部 教育部（練成隊）診療部 支部 牡丹江、孫呉、林口、大連、海拉爾^{ハイラル}。”

当時の本部隊の任務は、“細菌の研究を担当、各部隊の防疫給水、血清、痘症、予防ならびに練成隊において青少年の教育を実施す。”と述べられている。これを関東軍防疫部の内容と比較すると、血清、痘症、青少年の教育の項が増加している。なお、「青少年の教育...」は、「少年見習技術員」（森村 1983：214-217）の教育のことと思われる。この間、ノモンハン事件の戦闘にともない、1939年6月、関東軍防疫部は、関東軍作命に基づき、防疫給水隊3コ（個）を編成し、第一線部隊の防水並びに戦場防疫に従事した（村上〔1969〕：11）。1945年8月9日—10日、ソ連軍の進出に伴い、本部、支部の隊員は脱出（厚生省援護局 1963:57の3）。8月15日終戦。

部隊の名称（呼称）について、触れておこう。1933年当時、関東軍防疫班の秘匿名（通称号、通称番号）として「加茂部隊」⁷⁾、「東郷部隊」と呼ばれていた（森村 1983：17, 常石 1995:83）。1941年8月以降、関東軍防疫給水部の秘匿名として「満洲第七三一部隊」と名乗る。「石井部隊」の名称は、IIIの目録中で記載してあるように戦時中から使用されていた。

II 石井部隊兵要地誌班に関する記事

筆者の調査範囲では、「石井部隊兵要地誌班」を記載している地理学の専門書を見出せなかった。下記の実録類中に書き記されている。



- 40番台は、ハルビン市濱江駅付近にあった第七三部隊第三部の施設と対応するので、本全図においては欠番とする。
(森村(1985)の巻頭折り込み図により作成)。

1) 森村(1985)の巻頭折り込みとして付されている「関東軍防疫給水部本部施設全図」(保存版)(作図 元総務部調査課兵要地誌班 吉田太二男, “一九四〇年(昭和十五年)八月当時の航空写真をもとに作図した.”(図中の付記))中に「兵要地誌班」が位置づけられている。その場所(図1中の番号2)は、郵便局、電報局、大講堂兼雇傭人食堂の所在している建物の一階である(図1参照)。

なお、石井部隊では兵要地誌班が、総務部調査課に属していたことを筆者はこの資料により知った。森村(1983)の巻頭折り込みとして付されている「関東軍防疫給水部本部満洲第七三一部隊要図」中にも「兵要地誌班」が位置づけられている。本図は、作成者、作図対象時期共に明記されていない。

2) 森村(1983:52)に次のように記されているので引用してみよう。

第七三一部隊には、細菌戦実施にそなえての膨大な地図のストックがあった。

単なる地図ではない。飲料水、河川、井戸など、細菌で汚染する“戦術目標、をこまかく活写した地図である。ソ満国境沿いの、あるいはソ連領内、モンゴル領内の軍事施設は徹底的に研究されて、詳細な地図とレポートが大量につくられていた。これを作成していたのが総務部兵要地誌班である。

この報告は、兵要地誌・地図作成作業の内容を正確に描写しているように受けとれる。

3) 森村(1983:70)は、“部隊には兵要地誌班と呼ばれる専門の地図屋がいる”と記している。

4) 森村(1983:229)は、少年見習技術員養成のための実地学習として、“少年隊員のある者は

兵要地誌班や航空班へ。”とも述べている。

5) 中央檔案館 [ほか] (1991:16) 中の田村義雄自筆供述書(一九五四年九月三〇日)において、1939年5月から1940年12月までの第七三一部隊の編成と任務についての証言記録で、本部(棟)内に“兵要地誌班 責任者不詳。情報担当と思われる。”と記されている。

III 石井部隊作成の兵要地誌類および関連文献目録

ここに掲載した石井部隊作成の兵要地誌類および関連資料は、つぎの規則に従って目録に作成された。なお、書誌的注解は本章後半部において記す。

1. 収録の範囲

1) 期間

原則として、1938(昭和13)年1月から1939(昭和14)年12月までに作成されたものである。

2) 対象とした資料

石井部隊および石井部隊の著作と推定できる兵要地誌類とした。

3) 所在調査の範囲

所在調査の範囲は、防衛研究所図書館(以下、防衛図と略す)に限定した。

2. 記述法

本目録は、兵要地誌および関連資料類をタイトルの読みの五十音順に排列した。

1) 書誌的事項の記載順序は、タイトル、責任表示、出版地、出版者、出版年月、頁(丁)数、大きさ、表^{オモテ}紙上に記された機密度に関する語句の順に記入した。

構成は次の通りである(／:改行)。

文献番号(以下、Noと略す) タイトル 責任

表示／出版地 出版者 出版年月日／頁（丁）
数； 大きさ／機密度に関する語句／注記／内
容

2) タイトルは、原則として標題紙によって記載した。なお、大きさは、原則として表表紙による。

3) 頁数の記入法は、ノンブルのある場合にはそれに従い、第何頁（丁）から第何頁（丁）までを示す。序文等でノンブルのない場合には、その総頁（丁）数を記した。独立した附図・附表は、できる限り記録した。

4) 機密度（重要度）について。対象文献は、刊行機関が軍ないし軍関連機関のために資料の機密性を表記している。そのため、表表紙に「秘」等の記載がみられる場合もある。それらの記載事項を記す。

7) その他。

(1) 使用漢字は、原則として現行の日本語を使用した。

(2) [] 記号は、筆者が必要と思われる語・数字を補記した場合に使用した。

() 記号は、説明・その他付加的に記す場合に使用した。

(3) 文献の内容を知るために必要と思われた目次等は、(内容) の項に記した。

(4) 目録中の注は、当該箇所の右肩に「注」と付して番号を記入し、各文献の書誌的事項の終わりに解説した。

(5) №の右肩に「#」を付してある資料は、源(2000)中の「わが国の兵要地誌目録(1926-45)」(41-54)にも記載されている。

№1. アムール河系ニ棲息セル魚類一覧表(其一)^{註1} 石井部隊兵要地誌班

[平房?] [石井部隊] [出版年不明。以下、

n.d.と略す]

[表] [4] 枚； 26cm

「秘」

注1. 外表表紙裏に「満蒙史料経歴書」(本経歴書の記載内容については源(2000:42)を参照)が貼付されている。

№2. 「イルックク」―「モスクワ」間航空路ノ
気象概要^{註1} 石井部隊兵要地誌班

[平房] [石井部隊] 1939.5.14

[本文] 第1丁(オ)―第9丁(ウ) [表]

79 [表]； 26cm

「秘」

謄写版(手書き)

注1. 外表表紙裏に「満蒙史料経歴書」が貼付されている。

№3. 外蒙赤衛軍^{註1}密偵スフバートル供述ニ係ル
同軍ノ衛生装備其他ノ状況ニ就テ^{註2} 石井部隊
陸軍軍医少佐 藤井栄太郎 陸軍軍医大尉 山形
鳳二

ハルビン [石井部隊] [n.d.]

目次 [2] 頁 [本文] [28] 頁； 26cm

「極秘」

謄写版(手書き)

(内容) 目次

一. 密偵ノ身分

二. 密偵ノ入満経路並逮捕ノ状況

三. 密偵ノ供述内容

1. 衛生隊 2. 軍隊内ノ疾病 3. 兵食 4. 宿舎 5. 防寒具 6. 一般ノ衛生教育 7. 予防接種 8. 飲料水 9. 軍用井戸ノ暴露事件 10. 毒瓦斯戦並B K^{註3}ニ関スル知識 11. 軍馬ノ疾病並防疫 12. 日本軍ニ対スル觀念 13. 結論

注1. 1917年、十月革命の過程でボリシェヴィ

キ（のちの共産党）は、工場単位で労働者の武装組織である赤衛軍（隊）を編成した。

注2．外表表紙裏に「満豪史料経歴書」が貼付されている。

注3．BKのBは、Biologyの頭文字で生物兵器を意味する。Kについては未詳である。

No 4．教育資料 兵要地誌調査研究上ノ着眼^{※1}

石井部隊 村上 〔隆〕 少佐

〔ハルビン〕 〔石井部隊〕 〔between 1938 and 1940〕^{※2}

〔本文〕〔3〕頁；26cm

〔秘〕

謄写版（手書き）

注1．外表表紙裏に「満豪史料経歴書」が貼付されている。

注2．陸軍省(1942:2483)によると、村上が陸軍少佐としての任官期間は、1938年8月2日から1940年3月8日までである。従って、本資料作成年は、1938年から1940年までの間と推定できる。

No 5 A．極東強制労働所ニ於ケル壊血病予防策^{※1}

山形〔鳳二〕大尉写

〔ハルビン?〕 〔石井部隊〕 1938.7

〔本文〕第1頁—第7頁；26cm

〔秘〕

上記資料と下記資料2点とが合綴されている。

B．極東「ソ」領漁獲概況 〔石井部隊〕

〔ハルビン?〕 〔石井部隊〕 〔n.d.〕

〔表〕〔6〕表；26cm

謄写版（手書き）

C．赤軍^{※2}給養管理ノ概況 石井部隊

〔平房〕 〔石井部隊〕 1939.3.26

〔本文〕〔2〕頁；26cm

謄写版（手書き）

注1．外表表紙裏に「満豪史料経歴書」が貼付されている。

注2．1918年、赤衛軍を受け継ぎ、トロツキーにより創設されたソ連の正規の軍隊。1946年、赤軍はソヴィエト軍と改称した。なお、1937年、「大粛清（大テロル）」により赤軍のトゥハチェフスキー元帥は銃殺され、軍首脳部の大部分も一掃されて、赤軍は大打撃を与えられた。このような大粛清の混乱の中で、極東ソ連側は、国境警護強化措置をとり、張鼓峰頂上に進出してきた。1938年7—8月、日ソ間でノモンハン事件の前哨戦と見られる張鼓峰事件が発生した。

No 6 [※]．極東「ソ」領河川攻撃並工作ニ関スル地誌的参考資料 其ノ一「アルール」河系^{※1} 石井部隊兵要地誌班

〔平房〕 〔石井部隊〕 1939. 5. 21

〔本文〕第1丁（オ）—第9丁（ウ）〔附表（「アムール」河源流及支流延長並流速）〕〔1〕表〔秘〕

謄写版（手書き）

注1．外表表紙裏に「満豪史料経歴書」が貼付されている。

No 7 [※]．極東「ソ」領兵要衛生地誌草案 西部地区^{※1, ※2} 石井部隊兵要地誌班

〔平房〕 〔石井部隊〕 1939. 4.

〔序〕〔半〕丁 目次〔半〕丁 〔本文〕第2丁（オ）—第9丁（ウ）〔表〕〔2〕枚 〔表（井水及河水について）〕〔1〕枚 〔本文〕第14丁（オ）—第34丁（オ）；26cm

〔秘〕

謄写版（手書き）

(内容) 目次

第一章 判決

第二章 作戦上ヨリ見タル地勢ノ概

要

第三章 作戦路ノ概況

第四章 気象ノ概況

第五章 住民ノ概況

第六章 宿営ノ概況

第七章 給養概況

第八章 給水概況

第九章 衛生状況

第十章 地域及都邑

注1. 外表表紙裏に「満豪史料経歴書」が貼付されている。

注2. 表表紙(後年に作成され、付されている)に記載されているタイトルは、「極東「ソ」領兵要地誌草案 西部地区」である。

No.8 A. 極東「ソ」領北部地区作戦ニ対スル地誌的並同衛生的着眼事項^{#1} 石井部隊兵要地誌班

[平房] [石井部隊] 1939. 5.

[本文] 第1丁(オ)―第3丁(ウ) ; 25cm 「秘」

謄写版(手書き)

本資料は上記文献と下記文献の合綴されたものである。

B. 極東「ソ」領東部地区作戦ニ対スル地誌的並同衛生的着眼事項 石井部隊

[平房] [石井部隊] 1939.4.21

[本文] 第1丁(オ)―第5丁(ウ) ; 25cm 「秘」

謄写版(手書き)

注1. 外表表紙裏に「満豪史料経歴書」が貼付されている。

No.9. 極寒地作戦ニ関スル二三ノ常識^{#1} 石井部隊

[平房] [石井部隊] 1939. 4.

[本文] 第1丁(オ)―第4丁(ウ) ; 26cm 謄写版(手書き)

注1. 外表表紙裏に「満豪史料経歴書」が貼付されている。

No.10. 赤軍野戦給水概況ニ就テ^{#1} 石井部隊

[平房] [石井部隊] 1939. 4.

[本文] 第1丁(オ)―第6丁(ウ) [2]丁 ; 26cm

「秘」

謄写版(手書き)

注1. 外表表紙裏に「満豪史料経歴書」が貼付されている。

No.11. 「ソウイェト」連邦ニ於ケル馬乳酒栄養療法ノ概要^{#1} 石井部隊 村上[隆] 少佐

[平房] [石井部隊] 1939. 5. 23

[本文] 第1頁―第8頁 ; 26cm

注1. 外表表紙裏に「満豪史料経歴書」が貼付されている。

No.12. 「ソ」, 「露」軍ノ野戦衛生勤務ニ関スル二三ノ参考事項^{#1} 石井部隊

[平房] [石井部隊] [n.d.]

[本文] 第1丁(オ)―第12丁(ウ) ; 26cm 「秘」

謄写版(手書き)

注1. 外表表紙裏に「満豪史料経歴書」が貼付されている。

No.13[#]. 対「ソ」作戦上特ニ顧慮スヘキ主要戦

疫ニ関スル地誌学的観察^{註1} 石井部隊 [陸軍軍医
少佐 村上 隆]^{註2}

[平房] [石井部隊] 1939.6.10

[序][半]丁 目次[1]丁 [本文]第1丁(オ) —
第30丁(ウ) 附録[11丁半] ; 26cm

「秘」

謄写版(手書き), 一部タイプ印刷

(内容) 目次

第一 腸チフス 第二 発疹チフス 第三 細菌性赤
痢 第四 痘瘡 第五 ペスト 第六 脾脱疽(炭疽
病) 第七 馬鼻疽 第八 回帰熱 第九 マラリア
附録(「主要伝染病ノ「ソ」連邦ニ於ケル呼称」
他6件)

注1. 外表表紙裏に「満豪史料経歴書」が貼付
されている。

注2. 序文の記名による。

No14. 対「ソ」進入作戦上重要視スヘキ疫病ニ就
テ^{註1} 石井部隊 村上 [隆] 少佐

[平房] [石井部隊] 1939.5.

[本文] 第1丁(オ) —第10丁(ウ) ; 26cm

「秘」

謄写版(手書き)

注1. 外表表紙裏に「満豪史料経歴書」が貼付
されている。

No15. 「ノモンハン」附近ノ兵要地誌抜粋 地勢
及地質(道路・河川・湖沼・湿地)^{註1} 石井部隊
兵要地誌班

[平房] [石井部隊] 1939. 7.

[本文] 第1丁(オ) —第18丁(ウ) ; 26cm

「秘」

謄写版(手書き)

注1. 外表表紙裏に「満豪史料経歴書」が貼付
されている。

No16. 北露ニ於ケル壊血病ト現地ニ於ケル予防
及治療法^{註1} [石井部隊?]^{註2}

[平房?] [石井部隊?] [n.d.]

[本文] 第1丁(オ) —第4丁(ウ) ; 26cm

謄写版(手書き)

注1. 外表表紙裏に「満豪史料経歴書」が貼付
されている。

注2. 防衛図のカード・ボックス (No30. 大東
亜戦争—満洲—満蒙) 内の排列法から推定す
る。出版地、出版者も同様である。

No17[#]. 満洲里兵要地誌資料^{註1} 石井部隊

[平房] [石井部隊] 1939. 5.

[本文] 第1丁(オ) —第3丁(オ) 附録第3
丁(ウ) —第4丁(ウ) [附図(満洲里市街
要図 縮尺1:約10000)] ; 26cm

「秘」

謄写版(手書き)

注1. 外表表紙裏に「満豪史料経歴書」が貼付
されている。

No18. 予想作戦地ニ於ケル交通上ノ特殊性ト野
戦衛生機関ノ運用ニ関スル若干ノ著意^{註1} 石井部
隊 村上 [隆] 少佐

[平房] [石井部隊] [n.d.].

[本文] 第1丁(オ) —第15丁(ウ) ; 26cm

「秘」

謄写版(手書き)

注1. 外表表紙裏に「満豪史料経歴書」が貼付
されている。

書誌的注解

ここでは、前述の目録に記載されている資料
について、内容紹介を行う。記述対象資料で目

録の(内容)の項において記すとこのできなかった構成、重要性(兵要地誌的意味、源(2000:54-58)で既述した事項は除く)を中心に書誌的注解を試みた。なお、地名呼称は、該当文献が使用しているものを採用し、必要に応じて原綴等を()内に付記する。

No1.本資料の内容は、アムール(Amur)河(黒竜江)およびウスリィ(Ussuri・烏蘇里)河等の周辺河・湖水に棲息する魚類に関する報告である。本報告が現地での調査報告であるのか、あるいは文書情報によるものなのかは判断しかねる。魚類の日本名、ラテン名、アムール河流域および周辺河の棲息地、其の外の棲息地については一覧表にして示す。なお、No6.においてアムール河および周辺の地誌が記述されている。

No2.本資料の成立経緯を見ると、“資料ハ労働赤軍最高軍事委員会ノ発評中ヨリ抜粋シタルモノナリ”(標題紙裏)と記されている。本資料が入手文献の翻訳であることを示している。本資料の重要性について、“当該航空路ハ当隊ノ特殊任務上予メ十分ナル調査研究ヲ要スル事項ナリ”(標題紙裏)(筆者下線)と述べられている。特殊任務とは何を意味しているのであろうか、ノモンハン事件(1939.5.11-9.16)開戦直後、対ソ戦を念頭において翻訳されたのではなかろうか。なお、石井部隊は、部隊専用の航空基地、専用飛行機を所有していた。

構成は、一、「イルクック」―「クラスノヤルスク」間、二、「クラスノヤルスク」―「ノウオシビリスク」間、三、「ノウオシビリスク」―「オムスク」間、四、「スウェルドロウスク」―「オムスク」間、五、「スウェルドロウスク」―「カザン」間、六、「カザン」―「モスクワ」間の六航空路からなる。これらの各航空路について、飛行可能な期間等の兵要地誌的作戦の内、兵要

航空の視点から解説を行っている。本文後、「イルクック上空各高度ニ於ケル平均風速[秒米]」他78表が付されている。

No3.本資料は、外蒙共和国[モンゴル人民共和国]赤衛軍の密偵スフバートル(本人は衛生部員ではない)に対する尋問から得られた供述に基づき作成された。

構成は、目次の通りである。内容を点検すると、本資料は、軍医が記述しているためか軍隊内の衛生面に関する事項を重点的に兵要衛生の観点から記しているように見受けられる。本文の終わりに「附言」として、^{チチハル}齊々哈爾および^{ハイラル}海拉爾の特務機関⁹⁾に対し、今回の調査への協力について謝辞が述べられている。

No4.本資料の構成は、源(2000:38)に記した通りである。兵要地誌調査研究上の全ての要目中に、“特殊任務”の遂行が記載されている。なお、『関東軍兵要地誌資料調査規程』⁹⁾の「第二 調査」の章においては、前記のような表現は見当たらない(関東軍司令部 1936:3-5)。

著者村上 隆(1900.10.23-1992.12.15)は、本稿の目録中、この資料以外に兵要地誌関連文献を三点も記し、兵要地誌編纂作業に重要な役割を果たした人物と思えるので、以下で少し彼の略伝を記してみよう。出身地は「福岡」。軍歴を見ると、陸軍軍医少尉へは、1924年6月30日に任官。陸軍軍医少佐への任官はNo4.にて既述したように1938年8月2日、同中佐へは1940年3月9日である(陸軍省 1942:2483)。最終階級は、陸軍軍医大佐で1943年8月2日に任官(陸軍省 1944:3426)。陸軍における職務については、1941年1月16日、関東軍防疫給水部総務部長陸軍軍医中佐であり、関東軍防疫給水部教育部長への兼職を仰せつかる(陸軍省 1941a:9)。1941年7月2日、関東軍防疫給水部教育部

長を免ぜられ、関東軍防疫給水部第二部長兼関東軍防疫給水部教育部長を仰せつかる。同時に陸軍軍医学校教官を命ぜられている(陸軍省 1941b:2)。1943年8月2日、第八方面軍軍医部部員(軍医大佐)に命ぜられる(陸軍省 1944:3426)。他に、大本営陸軍部幕僚部付兼陸軍科学研究所所員を歴任している(村山[1969]:24)。戦後(1968年頃)、福岡県医師会副会長に就任した。

ノモンハン事件の戦場附近は降雨量が少なく、給水は戦略上、重大な問題であった(防衛庁防衛研究所戦史室 1969:433)。事件当時の村上の活動について、“第二次ノモンハン事件に当たり、(14.6—14.9)、ホロンバイル草原の戦闘に参加した。(中略)特に戦闘末期には、敵戦車群の包囲下、よく給水源を確保する等、砂漠戦において防疫給水並びに防疫に関する限り、大きな貢献をなし、ソ蒙軍の企及し追隨するところではなかった。”(陸上自衛隊衛生学校[1969]:109-110)と記されている。この後、ラバウル(Rabaul)地区(パプアニューギニア)の第八方面軍軍医部の軍務に服する。

No5.本資料は、目録に記してあるように三文献を合綴したものである。「極東強制労働所ニ於ケル壊血病予防策」は、“戦時此ノ地方ニ作戰スル場合ヲ顧慮セバ...”(p.7)と述べられているように、兵要衛生上、価値を有する資料と思われる。本文献は、山形が富錦特務機関¹⁰⁾に出張中(1938.5.27)に偶然、見出し、複写したものである。データ・ソースは、“越境蘇連人ノ陳述ニ依ル(甲)”(第2頁)としている。要旨は、極東強制労働所において壊血病予防策として樅の葉の煎汁を服用させているとの記事である。

「赤軍給養管理ノ概況」は、赤軍給養システム(組織)について述べている。

No6.本資料の構成は次の通りである。1. アムール河 2. 源流及支流ノ状況 3. 交通運輸概況 4. 漁獲 附表第一「アムール」河源流及支流延長並流速。アムール河系の兵要地誌的重要性については源(2000:55)を参照。

No7.本資料の構成は(内容)目次で示した通りであるが、防衛図所蔵本は第五章から第八章までの本文を欠いている(但し、表の一部分あり)。対象地域の重要性については、源(2000:55)を参照。

第一章において、“本作戦地区ハ給水上ニ相当ノ困難アリ而モ交通網ノ発達一般ニ良好ナラサルヲ以テ対「ソ」進入作戰上第一線ノ給水及搬水ニ特種ノ編成装備並周到ナル計画ヲ要スヘシ”(第2丁(オ)―第2丁(ウ))、“地方給水資源ノ乏シキニ鑑ミ作戰部隊ノ給養ハ現地調弁ニ依ルコト殆ト不可能ナルヘシ加之糧食ノ細菌工作ニ遭遇スルノ...”(第2丁(ウ))と記され、給水、給養、衛生面での事前準備の必要性、さらにソ連側からの細菌工作(作戦)に対する注意を本資料は説く。しかし、防衛図所蔵本では、これらの事項についての相当部分章がかけられている。

防衛図所蔵本を見ると、作戦路、気象、衛生状況等に関して、現地で最近、収集したデータ、あるいは見聞により入手したデータ等に基づき作成された(統計)情報類が記載されているように見受けられる。

No8.文献「極東「ソ」領北部地区作戰...」の構成は、一. 兵要地誌的事項、二. 兵要衛生的事項の二部から成り立っている。一. は、黒龍洲平地一帯、小興安嶺ノ山地帯、「ザビタヤ」―河以東「ブレーヤ」―河流域、「ゼーヤ」洲一帯の四地帯に分けて兵要地理的特性を明らかにしている。“使用スヘキ特殊任務ヲ有スル部隊[例

へハ防疫給水部] 野戦衛生機関等...”(第1丁(ウ))と記され、石井部隊が示している特殊任務の一側面を窺い知る。二. では、衛生を始めとして、給水、給養についても述べている。

文献「極東「ソ」領東部地区...」の構成は、一. 主要作戦地域ヲ左ニ指摘シ必要ナル著意事項ヲ述ヘントス、二. 兵要衛生上ノ著意事項大要ヲ如シ の二部から成り立っている。一. では、浦塩要塞地帯、「ボセツ」地区、「ウオロシーロフ」平地、興凱湖(シンカイフ)、「ハバロフスクおよびコムソモリスク」の五地域に分けて、各地域の兵要地理的特性を明らかにしている。二. では、“就中「ソ」軍ノ細菌謀略ヲ考慮スルニ於テオヤ。”(第5丁(ウ))と記され、石井部隊がソ連側の細菌作戦に対して注目していた様子を知る。

No9. 日「ソ」戦争を前提にして、極寒作戦のキー・ポイントとして、“空腹. 疲労. 静止”(第2丁(オ))が凍死を招く点をあげている。将来の対戦において、“主要作戦路ニ給養部隊(仮称)ヲ配置シ特殊給養ヲ実施セシムヘキ要アラン”(第4丁(オ))とも述べている。

No10. 本資料の巻頭書名の副書名(サブタイトル)として、「赤軍野戦給水草案ニ依ル」が付されている。構成は、一. 野戦給水器材諸元 二. 貯水用器材 三. 管状井材料 [表][2] 表(人畜ニ対スル一人(一頭)当リ一日間ノ所要水量)(機械化部隊及飛行隊ニ於ケル一日ノ所要水量) 予想作戦地給水ニ関スル追加事項(一. 河水ニ関スル一般共通事項 二. 氷雪復水概況)から成り立っている。

野戦給水の意義について、“野戦ニ於ル量的茲ニ質的給水保障ハ機械化部隊ノ活躍化学戦細菌戦ノ必□性等ニ徴シ過去ノ戦争ニ較ヘ重大性ヲ倍加シタルモノナリ”(第1丁(オ))(筆者下

線)と記している。ここでも、本隊が、ソ連側の化学兵器・作戦、生物兵器・細菌作戦を想定していたことを窺わせる。

本資料の作成時期は、本文の初めに記載されている“昭和十四. 三. 二五”(第1丁(オ))であろう。ノモンハン事件の直前に執筆されたことになる。

No11. 著者である軍医 村上是、部隊内の兵要衛生上、結核性患者に対する霊薬としてソ連内で活用されている馬乳酒をとりあげ、解説をしている。馬乳酒は、“南欧「バルカン」半島並「ロシア」東部地方住民間ニ於テ夙ニ栄養療法特ニ結核性疾患ニ対スル霊薬トシテ広く使用セラレタリ”(第1頁)とされ、その製法は、“馬乳又ハ駱駝乳ヲ醗酵セシメテ製造スル酒ノ一種ニテ...”(第3頁)と記されている。

No12. 本資料の構成は、其一. 赤軍ノ軍配属野戦衛生機関ニ関スル最近ニ於ケル研究ノ一端 其二. 赤軍ニ於ケル主要ナル野戦衛生機関ノ現況ニ関スル大要 其三. 世界大戦ニ於ケル露軍ノ野戦衛生機関運用概況並損傷発生状況ニ就テの三部から成り立っている。衛生兵要地誌の視点から、仮想敵国であるソ連の正規軍 赤軍の野戦衛生機関に関する情報および第一次世界大戦当時のロシア軍の衛生機関に関する状況について述べている。なお、赤軍の衛生機関の現状として、“露軍ノ世界大戦時ニ於ケル衛生機関ノ配当計画並運用上ノ欠陥ヲ是正シ積極化セシムルコトニ努メツツアリ”(第1丁(ウ))と記している。

No13. 本資料の作成目的について、“対「ソ」作戦上特ニ多発ノ虞アル急性伝染病ヲ指摘シテ之カ「ソ」領ニ於ケル既往ノ発生概況等ヲ述ヘ聊カ軍陣防疫ノ参考ニ資セントス”(序)と記されている。

「ソ」領における伝染病の状況の統計表(第

一次世界大戦当時のデータをも含む)等の資料を活用して、解説している。現在(2001年10月)、米国内における炭疽菌感染事件の報道に関連して、本資料中の記事を紹介しておこう。炭疽病(熱)は、以前に西伯利において、人間・獣の間で大流行し、別名「シビリスカヤズバ」(西伯利疫病)として一般に知られている等の解説を2丁余り行っている。なお、「附録」中に、シベリア事変(シベリア)出兵の際、日本側のデータである皇軍[日本軍]の主要急性伝染病患者発生概況が記載されている。

No14.本資料は、対「ソ」戦を予想して作戦(衛生)準備用に作られたものである。目的としては、極東「ソ」領内においての“軍陣衛生ノ成果ヲ顕現シ陣中防疫ノ運用ニ適正ヲ得テ戦役ニ因ル損耗ヲ防遏シ...”(第1丁(オ))と記されている。著者は、“人的戦力消磨ノ原因タル主要戦疫”(第1丁(ウ))として、マラリア、発疹チフス、ペスト、壊血病をとりあげる。

No15.本資料の作成時期は、第二次ノモンハン事件(六月以降の衝突)開始後である。ノモンハンおよび周辺地域の道路、河川、湖沼および湿地を進軍等の兵要地誌の視点から記載している。内容が具体的で詳細な点から、著者は、対象地域を調査ないし視察した者の情報によって作成したのではなかろうか。

No16.本資料は、巻頭書名の脇に“[一九三四年シュミド^[ママ]ノ発評中ヨリ要旨ヲ摘録ス]”(第1丁(オ))と記されている。ソ連で刊行された文献からの翻訳であろう。北露においては、壊血病の予防法および治療法として、当地のシベリア松針葉樹浸出液を勧めている。

No17.本資料の構成は、一.位置 二.気象ノ概況 三.給水ノ概況 四.市街ノ概況 五.衛生状況 附録 附図の六部から成り立っている。満

洲里の兵要地理上の価値については、源(2000:58)を参照。

No18.本資料の構成は次の通りである(項以下を略す)。第一章 極東「ソ」領交通ノ概要(第一節 道路 第二節 鉄道 第三節 水路 第四節 航空路) 第二章 予想作戦地交通ノ特殊性(第一節 地形ト作戦路 第二節 気象ト交通 第三節 住民ノ文化並人口密度ヨリ観タル交通 第四節 経済形態の観タル交通^[ママ]) 第四章 作戦路ニ対スル赤軍ノ積極的特殊妨碍企画 第五章 野戦衛生機関ノ利用シ得ヘキ現地輸送具(第一節 自動車及「トラクター」 第二節 地方運搬具) 第六章 予想作戦地ニ於ケル野戦衛生機関運用上ノ着意

本資料が作成された背景には次のような事情があったのではないか。極東「ソ」領地域は、自給自足態勢が確立されない限り、欧ソからの補給に頼ざるをえない。このような状況下では交通手段(鉄道・水路・航空路)が兵要地誌の観点から重要であると考えられるからである。著者 村上は、極東「ソ」領において想定される戦争に際し、野戦衛生機関の運用上、独自の立場から対策を確立しなければならないであろうと記している(第1丁(オ))。第四章において、赤軍の空中挺進隊(「デサント」部隊)・瓦斯部隊等に注目している(第12丁(オ))。

IV 石井部隊作成の兵要地誌類および関連文献目録の検討

前記の目録に掲載された21点(合綴資料は各々を一点とカウントする)の資料全体を概観し、検討を行ってみよう。これらの資料は、石井部隊ないし同部隊の兵要地誌班が作成したものの内、極めて一部分であろう。ここでは、筆者が今回、試みた調査範囲の資料に限定して考察を

行う。刊行（作成）年が確定ないし推定されている資料16点（No2, 4, 5-A., 5-C., 6, 7, 8-A., 8-B., 9, 10, 11, 13, 14, 15, 17, 18; 全資料中約四分の三）は、1938年から1939年までの期間、集中的に上梓されている。しかも、ノモンハン事件の直前ないし最中のものが大部分である。この事実は、本資料群に貼付されている「満蒙史料経歴書」が示すような事情から生じたのではなかろうか。

対象地域はソ連、特に極東ソ連領域および旧満洲国とモンゴル人民共和国（1937年以降、この国は完全にソ連の衛生国化した）との国境線沿いである。本地域に関する資料が多数存在することは、わが国の陸軍が、満洲事変の勃発（1931）以来、対ソ連情報の入手を一層強化したことも一因ではなかろうか。

本資料群が取り上げている主題について見てみよう。筆者は、源（2000:37-38）で兵要地誌の3タイプについて説明をしている。その分類に従えば、本資料群の大半は、2と3のとの混成型つまりTopical Military Geography と Regional Military Geography とのミックスである。医学・衛生面の主題を重視した兵要地誌（衛生兵要地誌）が目立つ。タイトル中に「衛生」の語句を散見することや、著者の肩書に「軍医」（藤井、山形、村上）が記載されている文献が存在することからも窺える。

戦役時、兵士の死没原因は、敵側の攻撃によるものだけではなく、多くの割合を戦病死が占めている。防衛庁防衛研修所戦史室（1969:707-708）は、ノモンハン事件での日本側の死者・戦病者数を「第23師団部隊別消耗表 [1939年] 六月二十日—九月十五日」（十月二十七日、師団軍医部調製）中で、戦死 [者数] 4,786人、戦傷 [者数] 5,455人、戦病 [者数] 1,340人と報告

している。また、同書（1969:713）では、「第2次ノモンハン事件部隊損耗状況調査表（統合表）」中で、戦死 [者数] 7,696人、戦傷 [者数] 8,647人、戦（平）病 [者数] 2,350人と記している。石井部隊において、敵地での風土病等の予防・治療に注意を向けている資料は5点（No5-A., 11, 13, 14, 16）ある。

なお、地理学の専門家（研究者）の関与については、未詳である。地形、気象に関する記述を筆者が検討した限りでは高度な専門用語等はほとんど見当たらなかった。

印刷形態は、謄写版（手書き）が17点（全資料中約81%）を占める。この結果は、資料が現地（ハルビン・平房）において作成されたために、活版印刷ではなく謄写版（手書き）印刷に付されたからであろうか。あるいは、製版をする時間的余裕がなかったからであろうか。

本資料群は、対象地域に関する参考資料（文献リスト）・参考に供した兵要地誌図をほとんど掲載していない。このことは、石井部隊に先行の作成（調製）資料が少ないのか、あるいは蓄積データが乏しいのか判らない。現時点では不明である。（源（2000:41-54）では『満蒙兵要地誌概説』等、数点の関連資料を掲載している）

本稿は、石井部隊兵要地誌班ないし同部隊の作成した兵要地誌類が、当部隊の防疫・給水と言う表面と人体実験・細菌作戦と言う裏面、双方の活動に深く関わっていたことを問うための基礎的資料を提供した。今後、石井部隊の上位組織である関東軍情報部が作成した兵要地誌類を関東軍司令部（1936）等を参考にして調査・分析し、後日に発表してみたい。

本稿を作成するにあたり、細谷新治一橋大学名誉教授に貴重なご助言を賜った。本研究は、2001（平成13）年度淑徳大学学術研究助成費の

一部を使用した。本稿の一部は、2000(平成12)年度科学研究費補助金 基盤研究(B) (1)「地政学・植民地主義との関連から見た近代日本の国家形成および地理・空間の思想」(研究者代表 水内俊雄 課題番号10480013)の研究集会(2000年10月9日、西鹿児島)で、発表し、参加者から有意義な助言がなされた。以上の方々・機関に厚くお礼申し上げる。

注

1) 常石(1995:27)によると、日本政府が公開している第七三一部隊に関する文書は、「関東軍防疫給水部略歴」(厚生省援護局 1963)、「在満兵備充実ニ関スル意見」(板垣 1936)、「陸軍日記」中の幾つかの文書(高橋 1982:lv-lvi)の三種であると述べている。

2) 例えば、ハバロフスク(ソ連)における、元第七三一部隊隊員に対する尋問資料の公開記録として、『公判記録——七三一細菌戦部隊』(完全復刻<普及版>)(東京 不二出版, 1982, 788 p.) (『細菌戦用兵器ノ準備及ビ使用ノ廉デ起訴サレタ元日本軍軍人ノ事件ニ関スル公判書類』(外国語図書出版所, 1950(筆者未見))の復刻本)があげられる。中国側の裁判資料では、中央檔案館 [ほか] (1991)他がある。

3) 石井四郎の履歴について、日本近代史料研究会(1971:9)は次のように記載している。

[千葉] 明25[1892].6.25-昭34[1959].10.8
大10[1921]・3京都帝大医学部卒 10・4陸軍
二等軍医・近歩3連隊付 11[1922]・8第1
師団病院付 13[1924]・8陸軍1等軍医
15[1926]・4京都陸軍病院 昭2[1927]・7医
博 3[1928]—5[1930]年・欧米出張 5・
8三等軍医正・軍医校教官 7[1932]・8兵

本付 8[1933]・4軍医校部員 10[1935]・
8二等軍医正 11[1936]・8関東軍防疫部長
13[1938]・3軍医大佐 14[1939]・4中支那派
遣軍部防疫給水部長 15[1940]・8関東軍防
疫給水部長 16[1941]・3軍医少将
17[1942]・8軍医校付 20[1945]・3軍医中
将・関東軍防疫給水部長 石井式無菌濾水
機の発明者 細菌兵器の研究者

上記の履歴に補足説明をしておこう。石井は、本履歴に記載してあるように昭和15[1940]年8月と20[1945]年3月の二回、関東軍防疫給水部長を歴任している。これは、石井が公金横領の発覚により部長を解任されたので、1942年7月-1945年3月の期間、北野政次少将が部長に就いたためである。(森村 1983:260-261)。

4) 石井の欧米出張の時期について、森村(1983:256)は、“一九三〇年(昭和五年)春のヨーロッパ視察旅行であった。”、“石井四郎がヨーロッパ各国の“忍び旅”から帰国したのは一九三一年(昭和六年)秋である。”と記している。常石(1995:82)と齟齬が見られる。

5) 本文献のタイトルは、「関東軍防疫給水部略歴(関東軍防疫部)」である。3頁からなり、本稿 p210 に既述したように、第1頁の始めに創設当時の部隊(関東軍防疫部)の組織内容が掲載されている。常石(1995:27)は、本文献の経緯について、“一九八二年四月六日に厚生省が国会へ提出に際して一般に公表した。”と記している。この点に関して、本資料が綴られている外表紙には、“昭和三十八[1963]年三月一日 厚生省援護局”と記されている。両者の相違について、現時点では未詳である。

6) 石井は、防疫・給水活動分野において、発明をしている。そのひとつは、「石井式野戦濾水

機」(動力式・手動式)であり、1936年6月、正式に陸軍に採用され、動員部隊のために整備される(高橋 1982 :lv, 北条 [1969]:3)。石井式野戦濾水機は、1931年11月から1934年9月の期間に実用化され、同年、特許を取得(特許番号第一〇六一〇四号)(常石 1995:85)。試作品が完成したのは1932年であった。以後、1936年には、機体を鉄製からアルミニウム製に改良された(北条 [1969]:3)。名称が石井式野戦濾水機から「石井式衛生濾水機」に改められた(図2の表題参照)。この経緯について、江口([1969:103])は、“昭和13 [1938] 年春、初めて本機は正式に野戦部隊用として整備せられることになり、名称も衛生濾水機と改称されることになった。”と説明している。(前述のように整備した年が1936年なので、名称変更時期は、1938年ではなく1936年ではないか。)

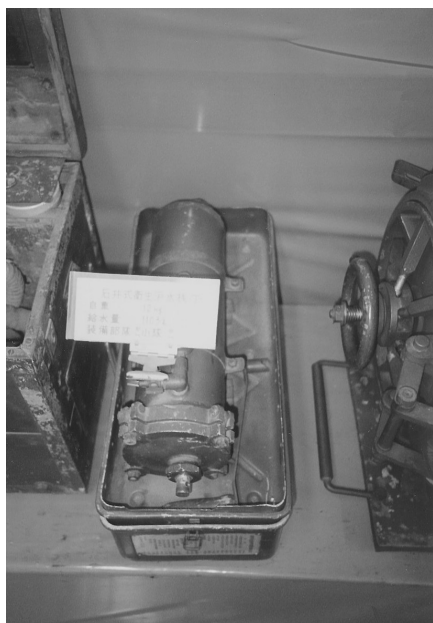


図2-a 石井式衛生濾水機 (T)

自重12kg 給水量110ℓ/h 装備部隊：小隊
(2000年9月6日 筆者撮影)。

筆者は、明治以来の戦役に使用された衛生関係の資料を展示している彰古館(東京都世田谷区池尻1-2-24。陸上自衛隊衛生学校内)を2000年9月6日、訪問し、本機体(手動式3種)を実見した(図2-a, 2-b.を参照)。その際、館長の説明によると、昭和30 [1955] 年頃まで、演習時に本機を使用していたとお話を伺った。

7)「加茂部隊」の名称は、石井の出身地、“千代田村に加茂という小集落”，つまり現在の千葉県芝山町加茂に由来する(森村 1983:279)。

8)「特務機関」には、二様の意味がある。ひとつには、陸軍の組織は、平時編制上、軍隊・官衙・学校の三区分から成り立っている。これらの三区分に属さない一区分(例えば、皇族付陸軍武官、外国駐在員等)の総称。ふたつめには、外地等に置かれた諜報機関あるいは占領地に置



図2-b 石井式衛生濾水機 (甲)

自重5.5t 給水量30t/h 装備部隊：軍(6機)師団(3-4機)
1台で歩兵1コ連隊分の給水可能。
(2000年9月6日 筆者撮影)。

かれた行政実施機関なども便宜上、特務機関と呼ばれた(原・安岡 1997:278, 有賀 1994:93-94)。ここでは、後者の意味で使用している。齊々哈爾および海拉爾の両特務機関は、関東軍情報部に直属し、支部レベルである。なお、海拉爾の特務機関は1932年に新設(有賀 1994:94)。

9) 本文献は、兵要地誌の作成用調査マニュアルである。作成用調査マニュアルについては、既に源(2000:38)において三点を紹介・解説した。本文献の構成は、第一 総則 第二 調査 第三 経費 第四 報告 附表 兵要地誌の作戦準備ノ担任区分表 からなっている。第一 総則中に、兵要地誌的作戦準備のために調査すべき事項として、1 兵要地理 2 国防用資源及経済状態 3 兵要航空 4 兵要気象 5 兵要給水 6 兵要運輸、交通、通信 7 兵要衛生 8 兵要獣医衛生 9 満洲国接壤地域ノ兵要地誌 10 兵要地誌ノ見地ニ基ク用兵上ノ実験資料 11 作戦用図ノ整備が挙げられている。拙稿で取り上げた石井部隊作成の兵要地誌では、主として1, 5, 7, 9を対象事項としている。

10) 富錦は、東経132度00分、北緯47度23分に位置する(吉林省)。富錦特務機関は、関東軍に直属し、情報部 ^{チャムースー} 佳木斯支部の出張所として1934年に新設された(有賀 1994:94)。

文献

朝日新聞 2000. ペスト菌調査報告書あった——七三一部隊の細菌戦解明に光。朝日新聞2000年9月9日(夕刊):第14面。
朝日新聞 2001. 新世紀の夏に⑤——ナショナルリズムを超えて。朝日新聞2001年8月5日(朝刊):第38面(第2社会面)。
有賀 傳 1994. 『日本陸海軍の情報機構とその

活動』近代文芸社。

板垣征四郎 1936. 在満兵備充実ニ対スル意見。陸満密綴 自昭和十一年八月二十六日 至同年九月十六日 第十号。関東軍司令部。(防衛図所蔵)。

江口豊潔[1969]. 防疫給水と香港の衛生行政について。陸上自衛隊衛生学校編『大東亜戦争陸軍衛生史 巻7 戦陣防疫』103-146。陸上自衛隊衛生学校。

関東軍司令部 1936. 『関東軍兵要地誌資料調査規程』関東軍司令部。(防衛図所蔵)。

厚生省援護局 1963. 関東軍防疫給水部略歴(関東軍防疫部)。厚生省援護局『陸軍北方部隊略歴(その一)』57-57の4。(防衛図所蔵)。

全国憲友会連合会 1976. 『日本憲兵正史』研文書院。

高橋正衛 1982. 『軍事警察——憲兵と軍法会議』みすず書房。(続・現代史資料6)。

中央檔案館 [ほか] 編。江田憲治 [ほか] 編訳 1991. 『人体実験——七三一部隊とその周辺』同文館。

常石敬一 1995. 『七三一部隊——生物兵器犯罪の真実』講談社。(講談社現代新書)。

原 剛・安岡昭男 1997. 『日本陸海軍事典』新人物往来社。

北条円了 [1969]. 防疫給水部編成の由来。陸上自衛隊衛生学校編『大東亜戦争陸軍衛生史 巻7 戦陣防疫』1-6。陸上自衛隊衛生学校。

防衛庁防衛研修所戦史室 1969. 『関東軍<1>——対ソ戦備ノモンハン事件』朝雲新聞社。(戦史叢書)。

源 昌久 2000. わが国の兵要地誌に関する一研究——書誌学的研究。空間・社会・地理思想 5:37-61。

村上 隆 [1969]. 防疫給水部隊の運用と活用。

陸上自衛隊衛生学校編『大東亜戦争陸軍衛生史
巻7 戦陣防疫』7-24. 陸上自衛隊衛生学校.

森村誠一 1983.『悪魔の飽食——日本細菌戦部隊の恐怖の実像!』(新版)角川書店.(角川文庫).

森村誠一 1985.『悪魔の飽食 第三部』角川書店.(角川文庫).

陸軍省 1941a.『陸軍異動通報 第四号』陸軍省.(防衛図所蔵).

陸軍省 1941b.『陸軍異動通報 第百拾号』陸軍省.(防衛図所蔵).

陸軍省 1942.『陸軍将校実役停年名簿 下巻』(昭和十七年九月一日調)陸軍省.(防衛図所蔵).

陸軍省 1944.『陸軍将校実役停年名簿 第四巻』(昭和十九年九月一日調)陸軍省.(防衛図所蔵).

陸上自衛隊衛生学校[1969]『大東亜戦争陸軍衛生史 巻9 戦訓及び体験』. 陸上自衛隊衛生学校.

Unit 731 and Military Geography in Japan: A Bibliographical Survey

Shokyu MINAMOTO

This study examines the relationship between geography and the military in Japan before 1945 by focusing on the case of the “Ishii Unit,” also known as Unit 731, a secret biological warfare unit led by physician Shiro Ishii. Unit 731 was active on the Chinese mainland from 1933 to 1945. The study consists of a bibliographic survey of military geography and related documents compiled by Unit 731 and an analysis of the data from the viewpoint of the relationship between geography and military. This paper does not condone the diabolical activities of the Unit (vivisection of human beings in the process of developing biological weapons and actual deployment of biological weapons), but traces its connection to matters of geography. The paper consists of five parts: Introduction; I. Brief history of Unit 731; II. Survey of studies referring to the military geography division of Unit 731; III. Bibliography of Unit 731-compiled works pertaining to military geography and related themes; and IV. Study of Unit 731-compiled works pertaining to military geography and related themes.